

監修にあたって

このたび、2018年「皮膚病診療」の増刊号として発行される「ダーモスコピー 写真集」を監修させていただきました。皮膚科医は、これまで視診のみで多くの疾患を診断し、視診で診断困難な際には生検を施行し、病理組織学的診断を行ってきました。しかし、2006年にダーモスコピーが保険収載され、多くの皮膚科医がダーモスコピーを日常診療で使用し、いまでは内科医の聴診器のように、診察時になくてはならない機器となっています。ダーモスコピーにより診断能力は著しく向上し、いままで「あやしい、生検！」であったものが、「経過観察でいいでしょう」となり患者の負担が軽減されたことは疑いようありません。

ダーモスコピーは、さまざまな診療場面で使用され、とくに悪性黒色腫や基底細胞癌、色素性母斑、脂漏性角化症などの色素性皮膚病変での有用性は確立されていますが、日常診療で遭遇する多くの色素性皮膚病変以外の疾患での有用性も近年多数報告されています。尋常性疣贅では、肉眼で判別困難な角化や点状血管の有無を確認できるため、小型の病変の確認や治療経過の観察時にダーモスコピーは有用です。また、皮脂欠乏症患者では、肉眼的に観察できない乾燥状態を患者に示すことができるため、保湿外用薬の外用アドヒアランスを高める1つのツールとしても有用です。このように、本機器は色素性皮膚病変の診断のみでなく、使用法は多岐にわたります。

しかし、ダーモスコピーによる正確な診断能力は、短期間で修得できるものではありません。日々の診療の際に視診で診断できるものも必ずダーモスコピーを覗くくせをつけ、より多くの疾患を観察し、また、典型例の画像をより多くみることが上達の近道であると思われます。

本誌では、「ダーモスコピーの基礎知識～原理と機器の種類／診断法～」について、エキスパートである信州大学 皆川 茜先生にご執筆いただき、ダーモスコピーの基礎をわかりやすく解説していただきました。そして、これまで「皮膚病診療」に掲載されている症例を集めて、これらを、①色素細胞母斑、②悪性黒色腫、③基底細胞癌、④脂漏性角化症、⑤血管腫・出血性病変、⑥汗腺系腫瘍、⑦脂腺系腫瘍、⑧感染症、⑨爪甲・爪周囲の病変、⑩その他に分類し、典型的な症例とできるだけ簡単に解説した用語集を巻末に加え1冊にまとめました。本誌が読者の先生方の日常診療のお役に立てれば幸いです。

最後に本写真集の監修にあたり私をご推薦していただき、入局以来ご指導賜っております齊藤隆三先生、向井秀樹先生ならびに編集委員の先生方、症例集の編集・発行に際しご尽力いただきました協企画の方々、典型的な症例の画像の収集および執筆をしてくれた東邦大学医療センター大橋病院皮膚科学教室の教室員に深謝いたします。

東邦大学医療センター大橋病院皮膚科学教室准教授

福田 英嗣